The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語の空間表現と移動表現の概念意味論的研究
Author(s)	上野, 誠司
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44855
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【4】

氏　　名	上野誠司（うえのせいじ）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学位記番号	第　18056　号
学位授与年月日	平成15年6月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学位論文名	**日本語の空間表現と移動表現の概念意味論的研究**
論文審査委員	（主査） 教　授　高岡　幸一 （副査） 教　授　春木　仁孝　　助教授　由本　陽子 神戸松蔭女子学院大学教授　郡司　隆男

論文内容の要旨

本研究の目的は、日本語の空間表現と移動表現の意味の構造を、Jackendoff（1983, 1987a, 1990, 1991, etc.）の概念意味論（Conceptual Semantics）の枠組みで形式化することである。本論文では、「に」・「で」・「まで」・「へ」・「から」・「を」などを主要部とする後置詞句のうち、空間的な場所や経路・範囲の概念を表す後置詞句を「空間表現」または「空間句」と呼び、また、そのような後置詞句と様々な動詞とが共起して空間移動事象を表現する文を特に「移動表現」または「移動構文」と呼ぶ。本論文では、上記の後置詞のうち、特に、「場所」の表現に使われる「に」と「で」、および「着点」を表すとも「範囲」を表すとも言われる「まで」の分析に重点をおき、それらの後置詞が固有に持つ語彙概念構造（Lexical Conceptual Structure：LCS）、それらと共起する動詞が固有に持つLCS、そして、それらを含む形で構成される文の概念構造（conceptual structures）を解明する。

本研究の意義は次の2点にまとめられる。

・概念意味論への理論的貢献：普遍的意味理論を目指す概念意味論（Jackendoff 1983, 1987, 1990, 1991, etc.）の日本語への適用可能性を検証し、新たな理論的提案を行うこと。

・日本語の語彙意味論への記述・説明的貢献：概念意味論の普遍的視点から、日本語の空間表現と移動表現という具体的事例を分析することにより、日本語の語彙意味論に対して記述・説明的貢献をすること。

第1章では、第1.1節で前述のような本研究の目的・意義を述べ、第1.2節で、本研究の理論的背景を述べる。1.2.1節では、Jackendoff（1990）が意味理論一般の基礎的課題として提示した「意味の問題（The Problem of Meaning）」と「対応の問題（The Problem of Correspondence）」について述べ、さらにJackendoff（1991）が提示した語彙意味論（lexical semantics）の二つの課題について述べる。1.2.2節では、「三部門並列モデル（Tripartite Parallel Model）」（Jackendoff 1996）と呼ばれる文法モデルに立脚した概念意味論の理論的な機構の概要を述べる。1.3節では、第2章以降の分析の準備として、Jackendoff（1983, 1990, 1991）の枠組みにしたがい、空間表現の分類の概要を述べる。

第2章では、概念意味論への理論的貢献として、概念構造に対する適格性制約（well-formedness constraints）を提案する。この制約は、後の第3章、第4章の事例研究にも適用される。2.2節でJackendoff（1983）の主題関係仮説（Thematic Relations Hypothesis）の下での個々の意味場（semantic field）の定義が、概念構造に対する形式的な適格性制約としての役割を果たしていることを指摘する。2.3節では、概念構造に対する新たな二つの適格性制約として「主題－経路関係制約（Theme-Path Relation Constraint）」と「意味場一貫性制約（Field Consistency

Constraint）」を提案する。概念構造における制限修飾部（restrictive modifier）と制限修飾される主要部（head）との間には何らかの意味カテゴリーに関する制限があることは Jackendoff（1990）によっても指摘されていたが、その制限の具体的内容についてはまだ明らかでない面が多い。「主題－経路関係制約」はその具体例の一つとなるものである。2.4 節では、これらの制約を用いた事例研究として、Goldberg（1991, 1995）が自身の提案する「単一経路制約（Unique Path Constraint）」によって説明されると主張した種々の共起制限現象を採り上げる。Goldberg（1991）は「単一経路制約」を、（単なる意味的制約でも統語的制約でもなく）統語構造と意味構造の「対応付け（pairing）」に対する制約、すなわち Goldberg の構文文法（Construction Grammar）でいうところの「構文的な（constructional）」制約として提案した。それに対してこの 2.4 節では、Goldberg が扱った共起制限現象が、実はこの２章で提案するような概念構造に対する複数の適格性制約どうしの相互作用の帰結として、概念構造レベルで説明されるということを示す。

第３章では、「部屋の中に」/「部屋の中で」のような、日本語の後置詞「に」または「で」を主要部とする空間概念を表す後置詞句（「に」（場所）句、「で」（場所）句と呼ぶ）と動詞とを含む文に対応する意味/概念構造を、概念意味論の枠組によって形式化する。次の問題ⅠとⅡについて考察する。

問題Ⅰ　場所の「に」と「で」の分布と意味的相違の要因は何か。

問題Ⅱ　その分布・意味的相違は、どのように概念構造の表示に反映されるか。

本稿は、「に」場所句と「で」場所句の分布と意味の違いが概念構造の表示における構造的位置の違いに還元されると主張する。具体的には、これら二種類の場所句について、それぞれ、統語構造と概念構造との対応を認可する対応規則（correspondence rules）を提案し、これによって、問題ⅠとⅡに一貫した説明が与えられ、「に」/「で」場所句と、それらと共起する動詞との間の様々な相互作用に原理的な説明が与えられることが示される。第一に、「に」場所句には「着点」または「着点指向の方向」としての解釈が存在するのに対し、「で」場所句にはそのような解釈が存在しないという事実は、日本語という個別言語の「に」と「で」という特定の語彙項目に固有の単なる偶然的事実ではなく、第３章で提案される２つの対応規則と、第２章で提案される「主題－経路関係制約」との相互作用の帰結として説明される。第二に、場所句が存在・位置づけを表す動詞「ある」と共起する際に見られる「に」と「で」の交替現象が、本章の対応規則と、Jackendoff（1983）の主題関係仮説と意味場の定義に基づいて明示的に説明される。第三に、「立つ」、「座る」などの形状動詞（verbs of configuration）の語彙概念構造を分析し、「に」場所句と共起できる形状動詞と共起できない形状動詞とがあることを指摘し、両者の LCS を提案する。

第４章では、日本語の空間移動表現のうち、特に（4.1）の「岸まで」のような「まで」句といわゆる移動様態動詞（verbs of manner of motion）が共起する文に焦点を当て、その意味/概念構造を解明することを主たる目標とする。

（4.1）ジョンが<u>岸まで</u>{歩いた/走った/泳いだ}。

従来、例えば Tsujimura（1991）等は、このような「まで」を主要部とする後置詞句を、英語の前置詞 to を主要部とする前置詞句と同じく goal を表すと見なしていた。Talmy（2000）の類型論によれば、英語は verb-framed languages に属すのに対し、日本語は satellite-framed languages という異なる類型に属すとされているが、Tsujimura（1991）のこの主張は、日本語も英語と同じ類型に属すという主張につながるものであり、ここに議論の必要が生ずる。本稿は、このような「まで」句が、次のように、英語の to を用いた着点句とは異なるアスペクト特性を持つことを指摘する。

（4.2）a. John {walked/ran/swam} to the shore {in/*for} one hour.

b. ジョンが岸まで{１時間で/１時間}{歩いた/走った/泳いだ}。

この事実が、「まで」の LCS と動詞の LCS、および、第２章で提案した「主題－経路関係制約」に基づいて概念構造レベルで説明されることを示す。特に４章は、従来の Tsujiimura（1991）、北原（1998）の分析でも十分に明らかにされていなかった後置詞「まで」自体の LCS を、Jackendoff（1991）で開発された素性と概念関数を利用することにより具体的に提示し、「まで」句と動詞の共起関係とアスペクト特性を、動詞と「まで」の LCS の組合せに基づいて明示的に説明する。「まで」自体は本来的に「経路（Path）」カテゴリーではなく、方向性の含意が未指定の単なる「空間（Space）」カテゴリーであり、このために第２章で提案した「主題－経路関係制約」に抵触せずに［EVENT］の修飾部に現れることが可能であり、また、移動動詞の LCS の GO 関数の Path 項の位置を占めることも可能になる。修飾部の位置の「まで」句は Event をアスペクト的に限界的（telic）にしないが、動詞 LCS の Path

項の位置を占めた「まで」句はEventを限界的にすることができる。こうして、（4.2b）のように、「1時間で」と「1時間」のいずれも共起させることが可能である理由が説明される。この説明の中ではまた、従来、区別が軽視されてきた「歩く」「泳ぐ」等の「移動推進動作」を表す動詞（影山・由本1997）と「踊る」「暴れる」等の物の「内的運動（object-internal motion）」を表す動詞とに異なるLCSを与え、両者を明確に区別する。そして、LCSの従属節と主節が入れ替わる節交替（Clause Inversion）を仮定し、影山（1986）の「概念構造の合成」を利用した北原（1998）の分析やLevin and Rapoport（1988）のlexical subordinationを利用したTujimura（1991）の分析の問題点を解決する代案を提案する。

第5章は本論文全体のまとめと今後の展望について述べる。第2章から第3章、第4章の考察を通じて、本稿が提案する概念構造の形式的な適格性に関する制約の妥当性が支持されたこと、また、概念形成規則、主題関係仮説と意味場の定義、概念構造における素性などの理論的な機構が、英語だけではなく、日本語の空間表現、移動表現の事実の説明にも基本的に適用可能であり、有効であることが示されたことを述べる。また、提案した制約の今後の理論的位置づけ、および、第3章の分析と「に」と「で」の史的変遷との関係に関する課題について触れる。

論文審査の結果の要旨

上野君の論文は、日本語の空間表現と移動表現の意味の構造を、Jackendoffの概念意味論の枠組みを用いて考察を行ったものである。実際においては、「に」「で」および「まで」などの後置詞（格助詞）句と移動様態動詞に焦点をあてている。

第1章（序章）においてJackendoffの概念意味論の理論的枠組みを解説したあと、第2章では、Goldbergが統語構造と意味構造との対応づけに関する制約である「単一経路制約」によって説明されると主張した結果構文や使役移動構文に見られる共起制限を採り上げ、そのような現象が、実は概念構造に対する複数の適格性制約どうしの相互作用の帰結として、概念構造のレベルで説明されうるということを考察している。

第3章、第4章は、実際の日本語における空間表現の事例研究にあてられ、まず第3章では、空間表現「に」と「で」を考察の対象とする。ここで両者の違いは直感的に観察されうるstate vs. eventという対照ではなく、概念構造上の構造的位置、すなわち意味的項か否か、の違いに帰せられると主張している。また、この章で提案される対応規則と第2章で提案された概念構造に対する適格性制約との相互作用についてもここで論述を加えている。

第4章では、「ジョンが岸まで泳いだ」のような「まで」句といわゆる移動様態動詞が共起する文に焦点があてられる。このような「まで」を主要部とする後置詞句は、英語の前置詞toや日本語の後置詞「に」または「へ」を主要部とする通常の移動表現の着点句とは異なるアスペクト特性を持つ。このことが、「まで」の語彙概念構造と動詞の語彙概念構造、および、第2章で提案された概念構造に対する適格性制約との関係により、概念構造のレベルで説明が可能である点を証明している。

特にこの第4章では、従来の先行研究の分析においても十分に明らかにされていなかった後置詞「まで」自体の語彙概念構造を、Jackendoff（1991）で開発された素性と概念関数を利用することにより具体的に提示し、後置詞「まで」の語彙概念構造や移動推進動作を表す「歩く、泳ぐ」などの動詞の概念構造をより精緻なものにすると同時に、概念構造内の主節と従属節が入れ替わる節交替という操作を仮定することによって「まで」と動詞の共起関係とアスペクト特性を説明し、先行研究の欠を補うに足る論述を展開している。

第5章は、本論文全体の結論にあてられ、さらに、適格性制約のさらなる検討、および日本語格助詞の史的考察などを含む今後の課題を展望して、本論文を結んでいる。

以上、上野君の論文は、同君が本研究科提出の修士論文以来一貫して研究テーマとしているJackendoffの概念意味論の日本語文への適用のその後の展開に基礎を置いている。この点で特に本論文の前半部においては修士論文の論述との重複が見られるが、随所にその後の研究活動を通して鍛錬した知見が窺われる。後半部は独創性に富み、中でも第4章における分析は精緻なものであり、理論的にも興味深い提案を含んでいる。

よって審査委員会は、本論文を本研究科博士論文（言語文化学）の学位請求論文として十分価値があるものと判定した。